

# 岡山大学における留学生宿舎の在り方 — 国際学生シェアハウスの実態と課題を中心に —

宇塚万里子・岡益巳\*・藤本真澄

What Should International Student Dormitories Be at Okayama University? :  
Current State and Issues of the International Student Shared House and Other  
Dormitories

Mariko UZUKA, Masumi OKA, Masumi FUJIMOTO

## 要旨

岡山大学の留学生宿舎の36年の歴史の中で、寮規則の遵守、人間関係の構築、施設や人的リソース不足など多種多様な課題が指摘されてきた。3年前に開所した混住型の国際学生シェアハウスにおいて新たに日本人学生が関与する問題が追加発生したこともあり、教育資源として寮を活用する視点から一転して、効率化のために管理を外注化する方向に舵を切った。留學生活の基盤となる住環境を整えることは元来、費用や労力のかかることであり、日常的に起こる課題を解決するためには、責任感のあるリーダー的日本人学生の果たす役割が小さくない。その一方で、課題解決できる日本人学生の育成には、きめ細かい指導・助言に加えて、教育資源としての寮の活用という大学のビジョンと推進力が必要である。

**キーワード：**国際シェアハウス、ユニットリーダー、フロアリーダー、異文化理解、教育資源

## 1. はじめに

宇塚・岡・藤本（2018）で明らかにしたとおり、2014年10月、岡山大学桑の木留学生宿舎では2棟の各フロアに1人、合計8人の日本人学生をレジデントアシスタント（RA）として配置することが実現した。RA制度の導入により、夜間・休日の一次的な緊急対応や日常的な些細な問題へのタイムリーな対応が可能になった。

2016年には国際学生シェアハウスが竣工し、同年4月に入居開始となった。国際学生シェアハウスは、1ユニット4人（留学生3人・日本人学生1人）の混住型の宿舎であり、日本人学生がユニットリーダー（UL）やフロアリーダー（FL）として留学生の支援に当たると同時に留学生・日本人学生の双方が積極的に交流することにより互いに異文化理解を深めるといった教育的効果が期待された。

留学生宿舎を教育的資源として上手く活用するためには、RA、UL、FLに対する日常的な指導・助言が必要であり、宿舎担当教員及び事務職員は相当な労力と時間を割かなければ

ばならない。しかしながら担当部署が関わる国際関連業務の増大や担当教員の学内異動という事情、コスト削減の視点から 2018 年度に宿舎管理を外部委託する方針が打ち出された。こうした現状を踏まえて、本稿では国際学生シェアハウスの現状と問題点について明らかにした上で、留学生宿舎を教育的資源として活用するという観点から今後の課題について考察したい。

## 2. 先行研究と本研究の意義

### 2.1 先行研究

留学生宿舎に関わる先行研究については、すでに宇塚・岡・藤本（2017, 2018）で紹介済みであるため、ここではその教育的意義に言及したものに絞って簡潔に触れる。

近藤・田中（2013）は、複数の大学に対する聞き取り調査を行い、混住を通じた交流促進により日本人学生の国際性を育成する方針が顕著になっていることを指摘している。正宗（2015a, 2015b）は、麗澤大学国際寮（混住寮）の留学生に対する調査結果から国際寮には社会教育的機能があることを明らかにした。吉田（2015）は、教育寮としての混住寮を提唱し、教育寮としての機能を考える場合には教育的介入や体系化したシステムが不可欠であると論じている。内海（2015）は、50 年前に国際的な人間教育の場として設立された「京都国際学生の家」の設立理念と運営の仕組みについて述べている。山川（2016）は、日本語教育の観点から大学寮を教育的資源としてより効果的に活用するための提言を行っている。吉田・田中・飯田（2016）は、混住寮に関する研究は日本人学生と留学生の人間関係構築に焦点を当てた研究が中心で、混住寮の学びや教育的意義に焦点を当てた研究は少ないと述べている。

宇塚・岡・藤本（2018）は、岡山大学桑の木留学生宿舎における RA 配置に至る経緯とその配置効果に言及し、さらに RA 終了時に実施したアンケート調査結果に基づき、RA 学生が宿舎内で発生する大小様々な問題を経験したことで、臨機応変に対応する柔軟性やコミュニケーションスキルが培われ、人間的に成長した事実を明らかにした。

このほかに、国際寮をグローバル人材育成の場として捉えた牧田（2013）、人材育成機能を備えた学生寮には大学側の活用戦略と運営力が必要であるとする望月（2013）などが存在する。

### 2.2 本研究の意義

宇塚・岡・藤本（2018）では、留学生宿舎を教育的資源として捉え、岡山大学桑の木留学生宿舎のレジデントアシスタント制度導入による教育的効果について論じた。宇塚・岡・藤本（2018）で指摘したように、留学生の住居関連領域に関する先行研究は、歴史が浅く、数もあまり多くない。吉田・田中・飯田（2016）によると、混住寮がグローバル人材を育成する場として注目を集めている理由は、2014 年度に始まった「スーパーグローバル大学

創成支援事業（SGU）」の採用基準の一つに混住寮の有無があったことに求められる。

表 1 に示したとおり、岡山大学には 4 つの異なるタイプの留学生宿舍が存在する。本稿では、収容定員が 120 人（留学生 90 人・日本人学生 30 人）と規模が比較的大きく、混住が実現している国際学生シェアハウスを中心に取り上げ、その効果的な運営を模索し、教育資源としての活用を再検討する。また、福居留学生宿舍、国際交流会館及び借り上げアパートの問題についても言及したい。

国際学生シェアハウスを含む留学生宿舍の管理運営を外部業者に委託するという岡山大学の新方針は、「文化的背景が異なる者同士が同じ空間を共有するだけでは良好な関係が実現しないことも多くの研究で指摘されている（正宗，2015b：2）」、「（混住寮は）専門的なスタッフの介入のもと、適切に寮を運営する体制を整える事が重要である（吉田，2015：10）」という見解に相反するものであり、まさに「大学側が学生寮を運営する力が問われている（望月，2013：29）」のである。上で引用した 3 者に共通する考えは、単に混住寮を提供すれば良いということではなく、大学側がその設置目的を明確化し、且つ、効果的な運営を行わなければならない、としている点にある。

表 1 岡山大学留学生関連宿舍の収容定員

<b>桑の木留学生宿舍</b>	留学生収容定員	その他の収容定員
2011年3月まで	132人（132室）	外国人研究員18人（18室）
2011年4月～2014年9月	150人（150室）	—
2014年10月～現在に至る	142人（142室）	日本人学生（RA）8人（8室）
<b>福居留学生宿舍</b>	留学生収容定員	その他の収容定員
2010年4月～現在に至る	21人（21室）	—
<b>国際交流会館</b>	留学生収容定員	その他の収容定員
2011年4月～2017年9月	18人（18室）	外国人研究員47人（47室）*
2017年10月～現在に至る	18人（18室）+16人（8室）	外国人研究員39人（39室）**
<b>国際学生シェアハウス</b>	留学生収容定員	その他の収容定員
2016年4月～現在に至る	90人（30ユニット）	日本人学生30人（30ユニット）

注 1) 2000 年度以降、2018 年度末までの収容定員の変遷を示す。

注 2) \*印、\*\*印には各々「夫婦用」14 室、6 室含む。

### 3. 国際学生シェアハウスの現状と問題

#### 3.1 設置に至る経緯 — シェアハウス検討 WG（2012 年度）

2012 年 10 月にグローバル人材育成院設置準備委員会が発足し、同時にその下部組織の一つとしてシェアハウス検討 WG（ワーキンググループ）が設置された。筆者の一人である岡

がシェアハウス検討 WG の座長に指名され、翌 2013 年 2 月 14 日付けで同 WG による検討結果の最終案を担当理事宛に提出した<sup>(1)</sup>。最終案は次のとおりである。

(1) コンセプト

本学に在籍する日本人学生に対するグローバル人材育成事業の一環としてシェアハウスを建設し、入居者である日本人学生と外国人留学生との日常生活レベルにおける相互交流を促進することにより、日本人学生の異文化理解を深め、外国語運用能力を高め、国際感覚を養う場を提供する。併せて、外国人留学生の日本文化理解度・日本語運用能力の向上を図る場とする。

(2) ユニット：4DK を 1 ユニット(南山大学名古屋交流会館をモデルとする。)

- ・ 4 つの個室に留学生 3 人、日本人学生 1 人が入居する。

個室は 4.5 畳程度 (南山大学は 6.5 畳)

- ・ 台所・食堂・風呂・洗面所・トイレ (2 室) は共用とする。

電磁調理器・冷蔵庫・電子レンジ・炊飯器 (2 台)・トースター・テレビ

- ・ 個室の設備は極力抑える。(例えば、テレビは食堂に置き、個室には置かない。)

ベッド・本棚付き机・イス・ゴミ箱・ロッカー・電気スタンド・エアコン  
インターネット接続回線

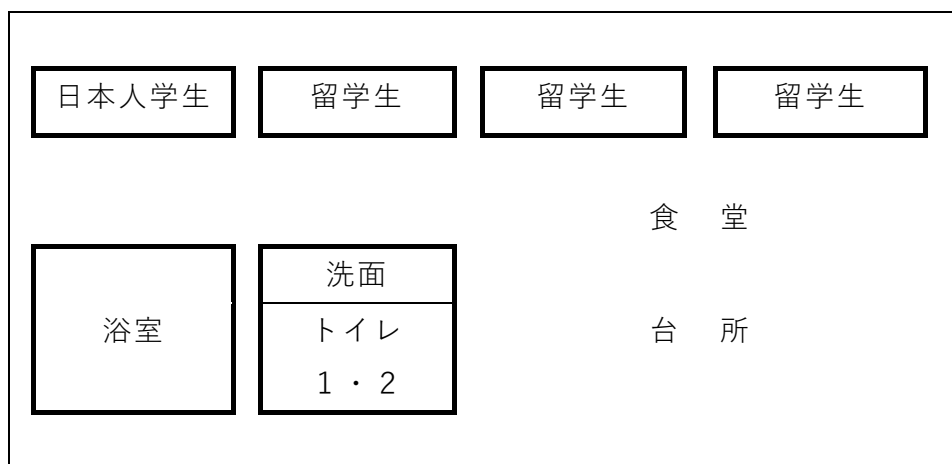


図 1 ユニット例：南山大学名古屋交流会館を参考に

(3) 規模：25 ユニット (100 名収容)

- ・ 1 ユニットに、英語圏出身交換留学生 2 名、非英語圏出身交換留学生 1 名、日本人学生 1 名が入居する。(EPOK による英語圏からの留学生 50 名、その他の交換留学生 25 名及びグローバル人材育成コースの日本人学生 50 名のうちの希望者 25 名)

\*シェアハウスの規模は、①英語圏からの交換留学生が何人確保できるか、②グローバル人材育成コースの日本人学生の中から入居希望者を何人確保できるか、によって決

定される。後者については、来年度グローバル人材育成コース参加者確定後に「シェアハウス入居希望の有無に関するアンケート調査」を実施し、入居者数の予測を立てる。

(4) シェアハウス全体での共同使用部分

- ・ 管理人室（1 階）
- ・ 交流室（1 階）：120 人～50 人程度収容できる広さ
- ・ 面会室（1 階）
- ・ 洗濯機・乾燥機（各階に○台または 1 ユニットに 1 台）

(5) 建設予定地など

- ・ 1) 国際交流会館東側、中央図書館北側の駐車場スペース、2) 南宿舎敷地内、3) 土生宿舎敷地内のいずれか
- ・ 何階建てか？

以上の内容の最終案を提出したが、直後に学長から入居者のない県職員住宅を借り受ける方針が打ち出され、WG 案はお蔵入りとなった。しかし、県当局との交渉は不調に終わり、次に JR 従業員宿舎の借り受けに向けての折衝が行われたが、これも不調に終わった。最終的には、2014 年スーパーグローバル大学の採択を受け、混住型の留学生寮案が再浮上し、2014 年秋から新たにシェアハウス WG が動きだし、今度は新たに留学生受入担当教員となった宇塚が WG に参画したが、建設面や予算面からすでに変更不可な部分も多く、交流室や面会室のない現状のデザインとなり、2015 年夏から建設が急ピッチで進んだ。それと同時に、管理会社への外注、家賃や入居費の設定、シェアハウスの規則や日本人学生（ユニットリーダーやフロアリーダー）の役割と自治体制、日本人学生の募集など、建物やユニット内の細部のレイアウト以外にも、ソフト面での整備が大急ぎで行われた。

### 3.2 国際学生シェアハウスの現状と問題

#### (1) 現状：2016 年 4 月～2019 年 3 月

国際学生シェアハウス（5 階建て、120 人収容、留学生 3 人＋日本人学生 1 人が 1 ユニット、30 ユニット）は日本人学生対象の女子寮の南側に建設され、2016 年 3 月 24 日に竣工し、同年 4 月に入居を開始した。1 ユニット 4 人という基本構造は、2012 年度末に提出されたシェアハウス検討 WG の最終案どおりである。一方で、検討 WG の提案と異なる点は、日本人学生の入居資格をグローバル人材育成コース（G コース）学生に限定していないことが挙げられる。2016 年 1 月に募集、4 月の入居という間際の募集であり、G コース担当教職員を含めて、果たして G コース学生だけで人数が確保できるかどうか不明だったことが募集の枠を広げた主な原因である。その結果、2016 年 4 月時点で留学生が入居している全 27 部屋分のユニットリーダーとなる日本人学生が集まった。

選考は RA と同様に書類と面接審査を行った。志望理由やリーダーとしての役割を確認した結果、2014 年開設時には、応募した 27 名全員を採用した。シェアハウスの日本人には入居＝リーダーという役割があるが、桑の木寮の RA と違って報酬はない。それは、大学周辺に比べて家賃が廉価であること、ユニットリーダー（UL）としての役割を理解し、納得した上で入居していること、の二点に基づく。

開設初年度の日本人入居者の確保は、借入金返済と留学生からの期待の両面から必須であり、関係者の心配の種であった。2014 年 10 月から 2018 年まで、年に 2 回 4 月と 9 月に欠員募集を行ってきたが、大体において部屋数に対して入居希望者の方が多く、特に、9 月入居に関しては、3 倍～5 倍の高倍率である。応募してくる学生は、1) 留学経験者、2) 留学前の準備体験を希望する学生、3) 留学に行く機会を逃してしまった上級生や大学院生など、に分けられる。入居希望理由を聞くと細部はそれぞれ違うが、日本人学生の目には、国際学生シェアハウスは、“普通のアパートではできない、国際的な何かを経験できる”という広義“学び”を期待しているという点は共通している。入居している学生のうち G コース生の割合は 5 分の 1 程度であるが、他の岡大生と比較して、留学生との交流に熱心な学生もいれば、そうでもない学生もいるため、現在に至るまで優先的な扱いをするには至っていない。

その一方で、シェアハウスに住んでいる留学生は、未成年が大半のグローバルディスカバリーコース学生（正規学部生）、滞在予定が一年未満の全学交換プログラム（EPOK）の学生、学部間交換留学生、中国東北部大学院留学交流プログラム（ONECUS）の学生、フランスグルノーブル大学連合からの大学院短期交換留学生などである。こちらは、基本的には WG の構想と同じであるが、岡山大学で受入れるプログラムの多様化に伴って、シェアハウスに住む留学生の在籍身分も多様化している。

## （２）問題点

シェアハウスでの問題は、主に寮の管理にかかわる生活上の問題と日本人学生に関連した問題に大きく分けられる。

まず一点目の寮の管理面上の問題は、騒音、ゴミのポイ捨て、喫煙（吸い殻ゴミ）、ゴミ出し、駐輪場のマナー、掃除など、どの寮にでもある問題であり、寮生から担当教員に相談に来ることはほとんどなかったが、管理人、近隣の女子寮などから苦情がきたり、月例ミーティングでの議題として各階 UL のとりまとめ役であるフロアリーダーから議題提起があったりした。いずれも、それほど深刻なものではないが、完全に解決するのは難しく、放置しておくとならば大きな問題につながる可能性がある。寮の管理部局であるグローバル・パートナーズ<sup>(2)</sup> 教職員、桑の木寮 RA、国際シェアハウスの FL で構成される月例ミーティングにおいても何度も議論され、学生主導で問題の解決を試みたが、試験期間や寮生の入替時期に収まり、しばらくすると再度問題行動が表面化するというサイクルを繰り返

す傾向がある。

次に二点目の日本人学生関連した問題は、さらに二種類に分けられる。一つは、学生個人の特有の性格や行動に起因するものであり、ユニット内で留学生との信頼関係が築けない、あるいは最初はうまくいっていたのに、半年ほど経って壊れてしまった、というケースである。寮内での人間関係のトラブルは時々見られることであるが、開所から2年半の間で留学生同士のトラブルが表面化するケースはなかったが、ULすなわち日本人学生に対する留学生からの苦情は初年度に2件、女子部屋から上がり、同じく初年度の男子部屋からも日本人学生が率先して洗面台やキッチンの掃除をしない、などの苦情が上がった。これらについては留学生相談室担当教員による指導が複数回行われ、改善もしたが、最終的には、日本人学生は寮から退去し、留学生達も帰国または退去時期を迎えた。

もう一つは、ULや一部のFLが寮全体の自主運営・管理に消極的である、という訴えである。日本人学生は、入寮の条件として、留学生との共同生活を通して、彼らが日本生活になじめるように、生活に役に立つ情報の入手、寮の決まりやルールの順守、日本語の支援をすることが求められている。しかし、留学生と同額の家賃を支払っており、且つ、RAのようにヘルプデスクや掃除キャンペーンなどのような具体的で寮全体に影響力のある業務が少ないため、学生もしくは、ユニットの構成メンバーによって学生間での交流の質や量に差があり、同室の留学生や他の日本人学生から不満の声が聞かれるようになった。特に、初年度4月の開所時期は応募した学生をすべて受け入れたために、最初はやる気があったが、1) そのモチベーションが続かず、気の合う留学生とだけコミュニケーションをとって満足してしまった学生、2) 学業や就活で忙しくて留学生と交流する時間がうまく取れなくなってしまった学生、3) 留学生と交流するのは楽しいが、リーダーとしての分担業務は避けて通ろうとする学生など多様なケースが見られた。これらの問題は、個人の責任もあるが、ULやFL制度全体に対する再検討がFL学生を中心になされた。この結果を反映して、2017年度からUL、FLの任命式を行うと共に、各々の役割分担の共通理解を図り、ユニット内でのリーダーとしての自覚と責任を果たすよう指導を重ねてきた。2018年度からは、ULが寮のイベントや行事の運営やユニット内で中心的役割を果たす仕組みづくりの一環として、各階フロアミーティング後に毎月、簡単なユニットレポートの提出を義務付けている。

日本人学生に関わる二つの問題に共通する点は、日本人学生に対してULとして周囲が期待しているにもかかわらず、当の学生にリーダー的資質や熱意に不足がある点である。応募の際には履歴書形式(記述式)の申込用紙を提出し、面接時には、シェアハウスで留学生をサポートしながら異文化理解を深めたい、と力説する学生が多いが、具体的な案や経験が乏しいため、途中で挫折してしまい、期待通りの結果が残せずに終わるか、イベントや行事の運営などの取り組みが長続きしない。この解決策の一つとして、定期的で、且つ学生に寄りそったきめ細かい指導が必要である。学生支援実習科目にならって、「国際理

解実習」といった科目名の Web Class を創設し、学生の役割を可視化することが担当教員である筆者（宇塚）より提案されたが、多くの賛同は得られず、実現していない。

### （3） 2016～2018 年度における国際学生シェアハウス関連事案

これまでに、2016 年度 2 件、2017 年度 0 件、2018 年度 2 件、2019 年前期 1 件、合計 5 件の国際学生シェアハウス関連事案が留学生相談室に持ち込まれた。2016 年度の事案 2 件は、いずれも同一ユニット内における「人間関係」トラブルであり、ユニット内の入居者の 1 人のマナーが悪いことがトラブルの原因であった。特に、人間関係トラブルが深刻であった 1 件に関しては、当該ユニットの学生 4 人にそれぞれ聞き取りを実施した結果、人間関係を修復することが極めて困難であると判断された。留学生相談室は、トラブルの原因となった学生に自主退去を勧め、当該学生はこれを了解し、退居した。この事案に関して、留学生相談室は延べ 14 回の対応を行った。また、2018 年度は同じく人間関係問題であったが、留学生同士のトラブルについて UL である日本人学生が心配して相談に来た。UL がいるときは留学生同士もそこまで露わな態度をとらないが、UL が不在な時は陰悪な関係になりそれぞれが UL に相談したため、それを心配してのことだった。苦情を言っている留学生が精神的に落ち着いたのと日本人学生がもう一方の留学生にアドバイスしてマナーなどが多少改善したところで、当該留学生が帰国し、解決となった。2019 年度は、単純に騒音のトラブルに端を発していたが、留学生が日本人学生に“(母国で日本は礼儀を重んじ、言わなくてもくみ取って気を遣う文化と学んだので) 日本人なのだから、礼儀正しくあるべきである”等と過剰な期待をしていたことで問題が複雑化したが、留学生相談室教員を交えてユニットメンバー全員で何度か話し合い、お互いにコミュニケーションをとって相手を理解、尊重する努力をする、と約束して落ち着いた。

この他、留学生相談室の対応としては、2017 年から出席が義務化された UL や FL の任命式&オリエンテーションにやむを得ず欠席した学生のフォローアップ面談を行った。面談に来た学生は 8 名である。それまで、オリエンテーションを欠席した学生へのフォローアップは FL に一任していたが、留学生相談室にて面談することで、FL としての期待されている役割ややるべきことを確認し、ユニット内の人間関係などについて立ち止まって考える機会となった。

## 4. 福居留学生宿舍、国際交流会館、借り上げアパートの現状と問題

### 4.1 福居留学生宿舍

福居留学生宿舍は、教職員独身寮を改築して 2010 年度に入居を開始した。収容定員 21 名の 3 階建てと小規模であり、日本語が堪能な日韓共同理工系学部留学生事業で入学した予備教育学生を中心に同宿舍に優先入居させた。しかし、当該学生は高校卒業半年後に来日する年齢の低い学生であり、且つ、予備教育期間中及び学部 1 年進学直後は時間的な余



裕があり、夜遅くまで集まって騒ぐため、近隣住民から苦情が寄せられた。これに加えて2011年春には失火事件も発生したため、同年10月以降来日する日韓予備教育学生は近隣との軋轢が比較的生じにくい桑の木留学生宿舎に入居を割り当て、福居留学生宿舎には年齢層が高い国費や特別プログラムの大学院生を中心に入居させる方針に変更した。また、2017年後期からの寮費の値上げに伴い、奨学金受給額の高い国費留学生もしくは希望者を優先的に配置している。

この寮は大学に隣接する住宅街に位置し、留学生の入れ替わりの時期になると、ゴミ出しと騒音についての苦情が近隣住民から寄せられた。そこで、大学からの一方的な指導に加えて、学生の自主管理も必要であるとの判断に基づいて、開設の翌年10月から入居学生達の自治会を組織し、会長・副会長を選出する運びとなった。入居者で会長・副会長に立候補した者の中から国際センター（当時）が適任者を指名する。会長・副会長は宿舎の自治を取りまとめるインセンティブとして、通常1年の入居期間を延長して2年認められることになった。こうした入居方針の変更については、留学生相談室と宿舎担当事務職員とが協議して原案を作成した。

福居寮は管理人が常時滞在しない寮ではあるが、自治会制度をとってから近隣からの苦情も減り、2014年からは桑の木寮の日本人RAと合同で入寮オリエンテーションや歓迎会など行ってルール徹底を図った。しかし、ルールを徹底するのは難しかったため、桑の木寮と同様、ゴミ回収を業者に委託したところ、近隣住民のとの目立ったトラブルは、減少した。また、規則違反で退寮させられた学生が出た5年前以降、現在に至るまで福居寮の問題で留学生相談室に持ち込まれたケースはない。

その一方で、桑の木寮に比べると施設やロケーションは好条件（表2参照）であるが、寮内イベントや行事の中心的役割を果たす日本人RAが同居していないことに寂しさや物足りなさを感じている学生は少なくない。会長・副会長制度は2017年まで続いたが、その後は寮優先入居資格を持つ留学生数増加により、新入留学生の住居を確保するためにインセンティブを設けられなくなり、寮の管理人の指導の下、ゆるやかな自治の形をとりながら現在に至っている。

表2 岡山大学留学生関連宿舎施設比較

宿舎	面積	建築年度	その他
桑の木寮 南棟 北棟	19.5 m <sup>2</sup> 14.4 m <sup>2</sup>	1988年 1983年 (改修2012年)	談話室、セミナー室など4つの共有スペースあり RA: 8人
福居寮	22 m <sup>2</sup>	2009年 (寮に改修)	談話室あり RAなし
国際交流会館	17.5 m <sup>2</sup>	2010年	交流棟あり RAなし

国際学生シェアハウス	LDK 29.6 m <sup>2</sup> 個室 7.9 m <sup>2</sup>	2016 年	共有スペースなし UL：30人 FL：5人（UL兼任）
------------	--	--------	--------------------------------

## 4.2 国際交流会館

国際交流会館は宿泊棟と交流棟から成る。交流棟は 2011 年 4 月に利用可能となったが、同年度はほとんどの交流イベントが従来通り桑の木留学生宿舎の談話室を会場として開催された。国際交流会館交流棟が本格的に利用されるようになったのは 2012 年度以降のことである。留学生支援ボランティア・WAWA 主催或いは岡山大学留学生協会との共催という形で異文化交流イベントが開催された<sup>(3)</sup>。また、留学生協会の下部組織である出身国別留学生会や岡山大学国際同窓会が主催するイベントも交流棟を会場として実施されることが多くなった。2012 年度における留学生相談室が関係するイベントは、国際交流会館交流棟の利用が 16 回に対して桑の木留学生宿舎談話室の利用は 8 回であり、前者の利用回数が後者を上回った（表 3-1 及び表 3-2 参照）。

表 3-1 国際交流会館交流棟を利用した交流イベント（2012 年度）

年月日	主催	目的
2012.04.28	WAWA／留学生協会	歓迎会
2012.04.30	ベトナム留学生会	母国祝日祝賀集会
2012.05.01	ベトナム留学生会	母国祝日祝賀集会
2012.05.05	ムスリム留学生会	イスラム教勉強会
2012.08.03	WAWA／留学生協会	送別会
2012.08.19	ムスリム留学生会	集会（イード祭）
2012.08.26	バングラデシュ留学生会	歓送迎会
2012.09.02	ベトナム留学生会	母国独立祝賀集会
2012.10.20	* 留学生同窓会	第2回総会ほか
2012.10.26	ムスリム留学生会	集会（イード祭）
2012.10.27	WAWA／留学生協会	歓迎会
2012.11.11	バングラデシュ留学生会	食事交流会
2012.12.22	WAWA	忘年会
2013.02.22	WAWA／留学生協会	送別会
2013.02.24	インドネシア留学生会	地区集会
2013.03.24	バングラデシュ留学生会	独立記念日祝賀会

注 1) 出所：岡・石田・中島・廣田（2013）pp. 25-55 より作成。

注 2) 大学及び他部局主催のイベントは含まない。

注 3) \*印の留学生同窓会は 2013 年度に国際同窓会に名称変更。

表 3-2 桑の木留学生宿舎談話室を利用した交流イベント (2012 年度)

年月日	主催	目的
2012.04.21	中国人留学生学友会	歓迎会
2012.10.13	マレーシア留学生会	集会
2012.12.24	インドネシア留学生会	送別会／小セミナー
2012.12.24	ベトナム留学生会	クリスマス会
2012.12.30	ベトナム留学生会	新年会
2013.02.09	ベトナム留学生会	旧正月祝賀会
2013.02.18	マレーシア留学生会	送別会
2013.03.23	ベトナム留学生会	送別会

注 1) 出所：岡・石田・中島・廣田 (2013) pp. 25-55 より作成。

注 2) 大学及び他部局主催のイベントは含まない。

宿泊棟は、主に研究者や半年未満の短期滞在者を受入っており、家賃は 2 週間単位の料金体系である。国際交流会館は福居寮よりもさらに小規模であり、大学構内かつ管理人の滞在時間も長いと、ゴミ捨てや掃除の指導も比較的行き届いている。また、岡山大学が国際バカロレア (IB) 入試を開始した翌 2012 年から海外 IB 校から進学する日本人学生のマッチングプログラムへの 10 月入学に伴い、入寮条件をそれまでの留学生のみから国際 IB 生 (主に帰国子女) へと拡大した。これにより、この寮が混住寮の先駆けとなり、後に桑の木寮に日本人学生を RA として入居する際の先例となった。国際交流会館では、6 年前に二人部屋に入居していた半年滞在の留学生間で人間関係トラブルがあったが、それ以降、学生からの要望に沿って備品を二人分ずつ備えたり、二人部屋には半年以下の超短期滞在のみを配置したりしたため、現在まで大きな相談が持ち込まれたことはない。しかし、いつも静かで寮の住人同士の交流が少ない、寂しい、寮生が多く多様性のある桑の木寮やシェアハウスがうらやましい、という声が聞かれる。

#### 4.3 借り上げアパート

2009 年秋には留学生在籍者数が 663 人にまで増加し、国費留学生、協定校からの交換留学生などの留学生宿舎優先入居資格を持つ留学生の中で、初めて入居できない者が出た。当時は民間アパートを借り上げるという発想がなかったため、該当者への家賃補助という形で対応することになった。しかし、大学間交流協定及び学部間交流協定に基づく交換留学生の増加に加えて、フエ大学院特別コース、0-NECUS プログラム、CAMPUS アジアプログ

ラム、プレマスターコース、3 + 1 プログラムなど優先入居資格を持つ留学生が増加したため<sup>(4)</sup>、民間アパートの借り上げにより対処せざるを得なくなった。

特に、新たにプレマスターコースと3 + 1 プログラムが開始した2014年10月は、主に中国からの留学生数が急増したため、借り上げアパート制度が開始された。両コースは半年または一年のコースであり、常時35名前後の学生が在籍したため、2人一部屋として大学に隣接した岡山大学生生活協同組合の管理する民間アパート20部屋の借り上げを開始し、その後、海外入試による学生や医歯薬学総合研究科の学生のために鹿田キャンパス近辺のレオパレスを借り上げるなど、最大で69部屋を借り上げていた。しかし、2016年に国際シェアハウスが開所したことにより、2016年4月から借り上げ部屋数を縮小し、さらに2017年には3 + 1 プログラムが終了したことにより、一時は全室返却したが、2018年秋の部屋が不足したため再度借り上げし、2019年秋の時点では、29部屋を借り上げている。

借り上げアパートは学生間では顕著な問題はなかった。しかし、地域の町内会に属したために、初年度は特に、ゴミ分別問題で苦情が寄せられたが、2年目からは中国語での指導や担任教員からの追加指導することで落ち着いた。

また、地震や集中豪雨などの天災が発生した際には、借り上げアパートにまとまって住んでいたため、安否確認を、迅速に行うことができた。

しかし、別の借り上げアパート5部屋と鹿田地区の学生用に2015年から2年間借り上げたアパートでは、施設が不十分である、他の寮から距離が離れていて孤立している、2人一部屋でも家賃が高い(鹿田地区)などの不満の声があがり、2017年までに全室解約した。

借り上げアパートは、自由度が高いために学生同士の軋轢は少ないものの、賃貸契約の手間や家具の手配、学生指導を要するなど、経済的にもマンパワー的にも大学の負担が大きいことが一番の問題である。また、民間アパートなので、寮生と比べて孤立しがちであったり、不審者が出没しがちであったり、災害時に大学の目が届きにくかったりするため、危機管理面では寮より脆弱であろう。

## 5. 今後の課題

岡山大学の国際学生シェアハウスを中心とする留学生寮の大きな課題は、施設面と管理・運営面との2つに分けられる。まず、施設については、今後さらなる留学生の受入数の増加には住居の確保が大きな要素となるが、現在すでにほぼ満室状態であり、部屋不足が予想される。そこで、2017年度に優先入居学生の規定を見直し、交換留学生、国費留学生他などの「優先」、その他プログラム「準優先」、私費学生など「その他入居者」と3つに分け、必要部屋数を最小限に絞り込んだ。しかし、岡山市内ではまだまだ言葉や文化的背景の異なる留学生を受入れてくれる民間アパートの数が限られているため、「留学生が安心して学業に励むためにも、優先入居者以外の一般の留学生のために少しでも多く部屋を確

保してほしい、という留学生受入部局の要望は強い。実際に、部屋が空いている場合は、入居希望学生を募り、抽選で入居者を決めている。さらに、大学の学生用宿舎は単身用しかない上に、民間のアパートでも家族で住める物件数は限られているため、家族と同居したい留学生にとって部屋探しは極めて時間と労力のかかるものとなってしまっている。さらに、民間アパートに引っ越す際には敷金、礼金、仲介手数料の他、家具を新たに購入するなど、学生にとっては、経済的にも大きな負担となる。その一方で、大学の借り上げアパートの部屋数を増加すれば、大学の管理業務量の増加につながるだけでなく、春と秋の来日時期によって受入留学生数が異なるため、年間を通じた一定部屋数の確保は非効率なものになる。加えて、家賃の不満やアクセスの不便などを理由に借り上げアパートへの入居を断るケースが目立つようになった。

もう一つの課題である寮の管理・運営体制については、教育資源としての寮のあり方と深く関連している。近年の大学寮の傾向として、既存の寮での留学生と日本人学生の混住化や新たな混住寮の建設が進められている。その目的は大学によって多少異なるが、概ね国際寮は教育資源として位置づけられ、RAなどのリーダー学生を中心とした自治活動や異文化理解の促進などの教育の実践現場としての仕組みづくりを目指している。本学でもSGU開始時点ではこの方向へ進んでいたが、2019年に寮の管理の外注化へ大きく転換し、業務の効率化を優先することになった。そのため、2019年からはRAの役割や責任範囲を見直して、毎夜のヘルプデスクの開設や掃除・ごみの指導等を業務から外し、オリエンテーションや緊急時の初期対応、学期に一回以上の寮内イベントの運営と期待される役割を最低限とする代わりに、家賃相当分の謝金支給を取りやめ、オリエンテーションやその他業務に対して時給制とした。同様に、国際学生シェアハウスの各フロアに配置したFL制度を廃止し、ユニットごとのULに関しても、従来は行っていた、オリエンテーションや入居手続きサポート業務は外し、ULという名称も留学生には伝えず、日本人のユニットメイト、という位置づけに変更した。そして、寮のルール遵守や生活面の指導は、大幅に勤務時間を延長した管理人と管理会社に一任する形に変更となった(表4参照)。これに伴い、日本人学生の入居審査も書類選考のみとし、面接選考を廃止した。これらの変更は、受入留学生と留学生相談の担当教員である筆者(宇塚)が、留学生相談室の配置換えに伴い、全学教育・学生支援機構の学務部管轄部局に異動したことに端を発している。そして、FLやRA日本人学生の熱意やスキルが低下しているが、その指導にまで留学生宿舎担当事務職員や受入担当教員の手が回らないため、と聞いている。しかし、国際シェアハウスは開所してわずか3年であり、学生の質の低下が問題視されるようになったのは直近の半年から1年であり、検証は不十分であるものの、日本人学生入居者の質低下の根本的な原因は、「大学が国際寮を教育資源として活用する」というビジョンや目的意識をもって国際寮を運営しているか、という点に尽きる。残念ながら現在の岡山大学では、教育資源という考え方よりも管理・運営の効率化が優先されていると言える。

表 4 留学生宿舍の管理人の受付時間の比較

	2018 年度	2019 年度
桑の木寮	平日：9:00 am～5:00pm 週末：なし	平日：10:00am～7:00pm 週末：9:00 am～5:00pm
国際学生 シェアハウス	桑の木寮と兼任 入居時期のみ滞在	週 3 回 12:00 pm～7:00pm
福居寮	桑の木寮と兼任 平日；約 1 時間程度 週末：なし	国際交流会館と兼任 平日：1:30pm～3:30pm 週末：なし
国際交流会館	福居寮と兼任 毎日約 1 時間	福居寮と兼任 平日：10:00pm～7:00pm (除：1:30～3:30) 土曜日：10:00pm～3:00pm

注 1) 上記の  
他、ゴミ出し  
やの管理、4

月 10 月の入退去の時期には時間が延長される。

FL・UL 体制を廃止した影響は半年足らずで出てきている。一つは、日本人学生の責任感が更に薄れつつある点である。入居前には、従来通りユニット内の生活面でのリーダー的役割を果たしてもらおうことと留学生と交流することを「顔合わせ会」において再確認しているものの、UL の任命書を廃止したこともあり、廉価な大学シェアアパートの一住人になってしまった日本人学生が目立ち始めた。日本人学生とユニットシェアすることを楽しみにして来日する留学生は少なくないが、その期待を裏切る形となってしまっていることは残念である。また、学生間の交流が積極的に行われているラッキーな部屋とそうでない部屋の格差も広がりつつある。二つ目は、留学生と交流したり、ユニットをまとめようとしてきたりする日本人学生にとって活動しづらい環境になってしまった点である。すなわち、UL という名称がなくなったことにより、掃除やゴミ出しなど面倒なことはやらない、日本人学生の言うことを聞いてくれない留学生が以前に比べて多く見受けられるようになってきた。リーダーという身分を前面に出して、留学生に指図する UL は後々トラブルのもとになることが多々あるが、ルール遵守など毅然とした態度で説明することが苦手な日本人学生の多くにとっては、UL というタイトルが自分自身を後押しし、大儀名分ともなった。留学生の立場からも受入やすかったのではないかと推測できる。以前は、UL 像として「高圧的な上司ではなく、口うるさくても面倒見の良い兄や姉」に例えて指導をしてきたが、UL という役職名は日本人学生にとっても留学生にとっても、想像以上の役割を果たしていたことがわかる。

それでは、UL 体制を復活させればよいか、という問題は単純ではない。普通の学生が留学生と初めて共同生活し、UL としての役割をある程度果たせるようになるためには、大学による学生へのきめ細かな指導・助言や支援が不可欠である以上、それが担保されていない現状では、安易に UL を配置すると学生間に寮の問題を丸投げするに等しい。その結果

として、後々、UL 自体が形骸化して日本人学生にも留学生にとってもフラストレーションの溜まる制度になりかねない。

## 6. 結び

1、2年生のうち寮生活をする学生が多い米国の大学では、寮生の生活の質保証、安全性、利便性などを全面的に出し、寮生の確保に努めているという印象が強く見受けられる。米国の学生寮の多くは、ハウジングオフィスという専門事務室が入居から退去まで管理・運営を一括して担っており、ミールクーポンの購入や健康保険の加入、予防接種の有無などが、入寮のための前提条件となっている。また、大学内の会計システム上、寮費の支払いが最優先とされ、寮費が未支払いの場合は、納入した授業料が寮費として決済される仕組みを取るケースがある。さらに、寮費は成績などの学務関係システムと繋がって、一元管理されていることが多い。

日常的な運営においては、RA やレジデントディレクター (RD) と呼ばれる職員が配置され、住民たちの問題処理からイベントなどの企画まで、寮の現場での運営に関わるだけではなく、非常時においても対応できる訓練を受けており、迅速な処置を提供している。加えて、警備面でも寮生の安全を確保するために、1階出入り口には警備員が24時間常駐して安全確保を徹底しているところも少なくない。また、寮内の学生同士の交流を促すような設備・運営形態が充実しており、例えば1階のロビーにはソファやテレビ、ボードゲームやビリヤードなどが置かれ、ムービーナイトやコーヒータイムなどのイベントの場所として活用されている。寮生活をきっかけに寮で友人を見つけ、留学生活に適応し、留学の幅を広げていく日本人学生は多い。その背景には、十分な訓練を受け、支援の素質がある RA が、留学生に対して特に気を配り順調な寮生活が送られるような仕組みを作り上げている。

1983年に桑の木寮が開所して以来、岡山大学の留学生寮は36年の歴史がある。その間、留学生寮は4か所5棟の建物になり、学生収容定員も約2.4倍に増え、研究者用居室の拡充、バリアフリー室の新設、規則の改定、日本人学生の入居開始、管理の外注化とその時々課題や学生のニーズに対応する形で改善・変革を重ねてきており、今日に至る寮の担当者や管轄部署の労力は計り知れない。しかし、留学生にとって安全で安心して学生生活を送ることのできる住環境の確保は、留学生活の根本を支えるも重要な要素の一つである。大学寮を管理・運営している限り、大学に労力や費用がかかることは米国その他海外の大学の寮の運営体制からもわかる。ましてや、細かい生活上のルールがあり、異文化理解や言語に偏りのある日本においては、文化的背景や生活習慣、価値観が異なる留学生を日々相手にする業務は、本来、手間がかかり課題の多いものである。その反面、学生達にとっては毎日の生活に密着し、多くの時間を過ごす寮での出来事は、大学や留学生活の印象を左右する大きな要因となる。留学生にとっては特に、日本人と一緒に生活しながら様々な

体験を共有することは、日本留学でしか経験できない学びである。また、日本人学生にとっても、交流イベント等の非日常的な国際交流では知りえない本音の異文化理解の場である。さらに大学にとっても、大学寮だからこそ実現できる実践型のグローバル教育であるゆえに、それを目標に国際寮を開設する大学が増えているのであろう。留学生寮の管理においても、責任感のある日本人学生の存在が大きな助けになりうることは、宇塚・岡・藤本（2018）で論じた通りである。

筆者には、米国の合理的な寮経営の仕組みが理想的であると思われるが、国情の異なる日本の国立大学で直ちに米国型寮経営の手法を取り入れることには困難が伴うばかりか、新たな運営上の問題が発生しかねない。

業務の効率化と教育資源としての寮の活用の両立を目指すにはどうすればよいか、大学の国際化という流れの中で、岡山大学の国際寮はどのような位置づけとなりえるのか、留学生をなぜ受入れるのか、留学生を大学のリソースとして活用することは可能か、そのためには大学として何が必要か、という点について管理部署だけではなく、単なる寮だけでもない大学全体の国際化の課題としてとらえ、再考を要する時期に差し掛かっているのではないだろうか。

\*岡山大学名誉教授

#### 注

- (1) 検討に当たって、留学生宿舎の問題に造詣の深い鈴木あるの氏（京都大学）に助言を求め、関係資料を提供していただいた。
- (2) 大学の国際化の促進のため、2014年8月にそれまでの教員組織であった国際センター及び事務組織である国際課を組織改編し、教員と部課長制をとる事務部との教職協働態勢をとるグローバル・パートナーズが新たに始動した。しかし、2019年4月には再度、教員組織であるグローバル人材育成院と事務組織である国際部に分割改編され、現在に至っている。
- (3) 留学生支援ボランティア・WAWAに関しては岡・安藤（2013）を、岡山大学留学生協会に関しては岡（2011）を参照願いたい。ただし、WAWAは2018年12月末を以てグローバル・パートナーズ所属団体ではなくなったことを機に、学務部学生支援課所管の非公認サークル、インターパスレルとして2019年4月から新たな活動を始めた。同様に、岡山大学留学生協会及びその傘下の出身国別等の各留学生会も2019年3月末を以て、グローバル・パートナーズの管轄を離れたため、2019年4からは一つの非公認サークル、「留学生会サークル」として活動を開始した。
- (4) 「岡山大学・フエ大学院特別コース」、「岡山大学・中国東北部大学院留学生交流プログラム（通称、0-NECUSプログラム）」、「CAMPUS アジアプログラム」、「大学院予備教育特別コース（通称、プレマスターコース）」の詳細に関しては、岡山大学公式



ホームページを参照願いたい。

<https://www.okayama-u.ac.jp/user/ouic/japanese/interstudents/index.html>

「短期留学受入プログラム（通称、3+1プログラム）」は中国の協定校にて日本語・日本文化を専攻している学生を半年から1年受け入れる有料の上級日本語の短期プログラム。2014年10月から3年半継続し、2017年3月をもって終了した。定員25名前後。

## 引用文献

近藤佐知彦・田中希穂（2013）「混住の教育効果および民間資金・資源の活用－留学生宿舎整備に関する聞き取りから－」『留学生交流・指導研究』Vol. 15, pp. 65-76.

牧田綾子（2013）「グローバル人材育成の場としての“国際寮”」『リクルート カレッジマネジメント』183, pp. 6-11.

[http://souken.shingakunet.com/college\\_m/2013\\_RCM183\\_06.pdf](http://souken.shingakunet.com/college_m/2013_RCM183_06.pdf)

（2017年9月18日閲覧）

正宗鈴香（2015a）「寮生活における留学生の異文化社会適応、人格形成、言語習得に関する事例研究－国際寮の教育的機能の可能性－」『麗澤大学紀要』第98巻, pp. 63-72.

正宗鈴香（2015b）「グローバル人材の育成を意識した国際寮の活用－国際寮の社会的機能から導かれる寮教育－」『留学交流』2015年9月号, pp. 1-8.

[http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2015/\\_icsFiles/afieldfile/2015/11](http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2015/_icsFiles/afieldfile/2015/11)

（2017年8月31日閲覧）

望月由起（2013）「学生寮の機能多様化と大学のストラテジー」『リクルート カレッジマネジメント』183, pp. 24-29.

[http://souken.shingakunet.com/college\\_m/2013\\_RCM183\\_24.pdf](http://souken.shingakunet.com/college_m/2013_RCM183_24.pdf)

（2017年9月18日閲覧）

岡益巳（2011）「岡山大学における留学生協会の再建と現状」『留学生交流・指導研究』Vol. 13, pp. 17-25.

岡益巳・安藤佐和子（2013）「留学生支援ボランティア・WAWAの活動を振り返って－その20年の総括－」『大学教育研究紀要』第9号, pp. 1-16.

岡益巳・石田聡子・中島嘉子・廣田陽子（2013）『2012年度留学生相談室活動報告書』岡山大学国際センター留学生相談室

志村恵（2015）「ハウスシェア型混住寮としての“先魁”」『留学交流』2015年9月号, pp. 31-36.

[http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2015/\\_icsFiles/afieldfile/2015/11](http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2015/_icsFiles/afieldfile/2015/11)

（2017年8月31日閲覧）

内海博司（2015）「外国人留学生の宿舎支援と“共同の生”－留学生と日本人学生の交流は

対等の立場でー」『留学交流』2015年9月号, pp. 24-30.

[http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2015/\\_icsFiles/afieldfile/2015/11](http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2015/_icsFiles/afieldfile/2015/11) (2017年8月31日閲覧)

宇塚万里子・岡益巳・藤本真澄 (2017) 「岡山大学留学生相談室に持ち込まれた住居関連事案に関する実証的研究」『岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要』第2号, 投稿中

山川史 (2016) 「短期留学生の大学寮におけるソーシャル・ネットワーク形成ー教育資源としての寮の活用ー」『留学交流』2016年9月号, pp. 5-20.

[http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2016/\\_icsFiles/afieldfile/2016/09](http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2016/_icsFiles/afieldfile/2016/09) (2017年8月31日閲覧)

吉田千春 (2015) 「留学生宿舎から混住型学生宿舎へー教育寮への転換に向けてー」『留学交流』2015年9月号, pp. 9-23.

[http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2015/\\_icsFiles/afieldfile/2015/11](http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2015/_icsFiles/afieldfile/2015/11) (2017年8月31日閲覧)

吉田千春・田中友章・飯田捷 (2016) 「混中型学生宿舎の計画と運営に関する研究ースーパーグローバル大学創成支援採択大学の先導的事例を対象としてー」『住宅計研究報告会論集 11』日本建築学会第11回住宅計研究報告会 (2016)